

特別賞 紀伊國屋書店賞

『好き？好き？大好き？：対話と詩のあそび』

R.D.レイン著 村上光彦訳

文学部 心理社会学科 3年 安田英広

この詩集を開くとき、私は単なる読む側ではいられない。良い悪い、面白い面白くないという尺度を用いて判断することができない。この詩集の中に、私たちが普段読む詩集で目にするような、きらりと光る一文というものを一向に発見できない。私はこの詩集を読む中で「だから何？」と作者レインに問わざるを得ない。「だから何？」と問う時、私はレインに先手を取られている状態である。ここで私は冷静で俯瞰した読み手から、自らぶつかり、私自身が変化する可能性のある読み手へとシフトすることになる。

この本のタイトルでもある「好き？好き？大好き？」という名の詩がある。この詩において変化するのは何もない。あるのは男女の呼びかけと応答のようなものである。この詩は、コンタクトが成立しているということだけを執拗に描いている。

二人の間のコンタクトの欲望を満たすのに重要なのはメッセージの内容ではない。相手の言葉をおうむ返しするような会話において唯一伝わるのは、あなたのメッセージを聞いたということと、あなたへメッセージを送ったということだ。そしてそれこそが最も伝えたいことなのだ。童謡「やぎさんゆうびん」で手紙を食べてしまう二匹のやぎが恋人同士だったのならば、手紙を食べることには何も問題はないのである。

対話は時と場面、その相手によって内容が変化するものだ。私たちは、あらかじめどのようなことを言おうと考えてから相手に伝えるのではない。相手に対面しながら話すことで、結論でさえも言い終わるまでに変わる可能性のあるものだ。それは相手の顔色を伺って言いたいことが言えないのとは違い、相手と対面しなければ言いたいことがわからない、というようなものなのである。

つまりコミュニケーションにおける内容とは、対話相手とのコンタクトによって同時に生起するものなのだ。先に内容があり、それを伝えるためにコミュニケーションを取るのではない。対面することで生まれるのが内容なのである。

レインは精神科医であると同時に反精神医学の旗手でもあった。彼はこの詩集のなかで精神科医と患者のやりとりを戯画化している。精神科医は質問する側で、患者は答える側だという関係性を滑稽に描き出している。しかしそれでは対話は起こらない。精神科医は内容を求めるあまり、関係性を軽視し、結果的に内容のないやり取りを続けることになる。

その堂々巡りに風穴を開けるのが、コンタクトなのだ。対話は立場の違いに甘んじ相手を俯瞰するのではなく、私自身が飛び込み関係性を作っていくことでしかできない。レインが「好き？好き？大好き？」を詩集の最後に置いたのは単なる偶然ではない。レインはそれまでの精神医学の態度に警鐘を鳴らしている。詩集全体が私に呼びかけてくる。コミュニケーションの本質は、ありがたい助言などではなく、自らを投げ打つ覚悟なのだ。